

モハマッド・バクリ シンポジウム

四方田 シンポジウムを始めたいと思います。先ほどまで『ジェニン、ジェニン』、それから『あなたがいなくなつて以来』というフィルムを見ていただいたわけですから、今日は会場に二人の方をお招きしました。日本女子大でイスラエルとパレスチナの問題について研究なさっている臼杵陽さんです。

それから、今回の上映に関して、もう本当にものすごい仕事をこなしてくださいましたイスラエル・アラブ文化の研究者である田浪亜央江さんです。よろしくお願いいたします。それから、もちろんモハマッド・バクリさんも、皆さんご存じだと思いますが、改めて紹介いたします。モハマッド・バクリさんです。(拍手)

まず臼杵さんと田浪さんに、五分間ぐらい、今回のシンポジ

ウムも含めて自由に話をさせていただいて、それから、どうぞ、臼杵さん、それから田浪さんから、バクリさんに対していろいろ聞きたいこと、あるいは話していただきたいことを引き出すような話をさせていただきたいと思っております。

臼杵 こんにちは。臼杵でございます。私は、パレスチナ、イスラエルの歴史を中心に研究しております。実は今日初めて映画を観たというくらいでございます。大変驚きました。

それで、まず観て、『ジェニン、ジェニン』のイスラエル側の反応が非常におもしろかった。といいますのは、イスラエル側の反応において、彼の映画を非難するときに、英語で *you are right*、要するに「血の復讐」という言葉を使っている。つまりこの文脈においては、皆さんご存じの方もいらっしゃると思

ますけれども、ユダヤ人に対する迫害とか襲撃は、必ずこの Blood libel、ベサハ（過越しの祭り）の後に起こっている。すなわち、ユダヤ人がキリスト教徒の少年を誘拐して、その血と肉で秘密の儀式をやっているなんていう話がうわさとなって広がって、キリスト教徒がユダヤ人を襲撃することなわけです。

つまり何が問題かといいますと、彼のつくった『ジェニン、ジェニン』という映画はパレスチナ人に関しての映像であるにもかかわらず、イスラエル側がそれをまず自分たちの文脈の中で否定的に位置づけるということをやっているという点なわけです。この点が非常に興味深いというか、そこではほとんどユダヤ人の閉鎖的な反応しかない。そういうユダヤ人の反応をまず驚きとして感じたということがあります。

もう一点。私、実はモハマッド・バクリさんの話を最初に聞いたのがヨルダンのアンマンというところだったんです。そのときに、彼が出演した映画はもちろんアラブ世界では上映しておりません。私の友人で、ヨルダン人の映画評論家がいまして、アドナン・マダーナートというんですが、彼がモハマッド・バクリさんの映画を見たいと言ったのです。ついでに、おまえは日本人だからイスラエルに入れる。つまり占領地に入れる。で、彼のビデオを買ってきてもらえないかと。つまりそれが「壁の向こう側」といいますか、「裏側」といいますか、というあの映画だったわけです。もちろん市販しておりませんが、エルサレ

ムにあるビデオを貸す店で何とか手に入れて持って帰ったわけです。

彼の映画はアラブ世界の中では、当時は八〇年代ですのを見る人は少なかつたんじゃないかと思いますが、映画そのものは口伝えで広がっていったんだろうという気がいたします。

三点目としてエミール・ハビービさんについてのことでありますけれども、私自身もともと歴史の勉強をはじめたとき最初に興味をもったのがパレスチナ共産党の歴史でありました。イギリス委任統治時代、つまりイスラエルが建国される前の労働運動を中心とするアラブ人の民族運動を研究していたんですけれども、そのときに出てくる指導者の名前が実はエミール・ハビービであり、エミール・トゥーマというギリシャ正教徒の活動家たちでした。彼らは当時まだ学生だったわけですけれども、一九四〇年代のパレスチナの歴史を語るときに避けて通れない。そのときに初めてエミール・ハビービという名前を知ったわけです。

今回私自身は文学とかその辺の素養がございませんので、むしろ歴史研究の中でエミール・ハビービさんを位置づけてみたい。つまり、共産党の位置づけを考えた場合、今やイスラエル共産党がアラブの人たちの利益を代表するような政党になっているという、むしろ左翼という側面よりも、マイノリティとしてのアラブの民族的権利を擁護する政党という形で位置づけられている。今では、状況が変わっておりますけれども、ハ

ビービと共産党とは以上のように受けとめていいんじゃないかなという感じがいたします。

以上のようなことを含めて、私なりにこの後モハマッド・バクリさんにいろんな質問をしていきたいと思っています。とりあえず五分間、イントロとして三つほどのエピソードのようなものをお話ししました。

四方田 どうもありがとうございます。本当にこれから始まる、大きな背景になる文脈と関心の持ちようといったものを、三つの点で提示していただきました。次に田浪さんから発言をさせていただきたいと思います。

田浪 皆さん、こんにちは。今、四方田先生のほうから紹介していただきました田浪と申します。昨日バクリさんがお芝居をしました、そのお芝居の脚本を今回担当させていただいたんですけれども、私とその脚本を担当するに至ったちょっと簡単な経緯をご紹介したいと思います。

実は去年のちょうど今ごろまで、二年間、イスラエルの北部のハイファに滞在しておりました。昨日のお芝居では主人公のサイドがイスラエルに潜入して再入国してから住んだ町です。イスラエル建国以前からユダヤ人が比較的多く住んでいたというところもあって、イスラエル国側からはアラブ人とユダヤ人の共存のシンボルとしてある意味利用されたりもする町なんですけれども、そこに滞在していません。

私自身、昨日のお芝居の原作者であるエミール・ハビービの

小説に非常に思い入れがありまして、その小説をお芝居にしたものがあって、それをバクリさんが演じているということで、滞在中にぜひ見たいと思っていたんですが、なかなかその機会がありませんでした。それで、機会がないんだったら私自身がアレンジして、私がまず観たいと。それから、若い世代ですと、この芝居を見ていない人たちもいるということで、ハイファで上演することで彼らが観るための機会を提供できたらいいなということもありまして、その芝居の上演のアレンジをしたわけです。

幸いにして非常にたくさんの人に来ていただきまして、昨日も本当に大入り満員でうれしかったですけれども、それと同じようなことが起こりまして、小さなホール、百席ぐらいあるところを借りていたんですが、当日になって、ちょっとこれじゃあ厳しいだろうということで、急遽大ホール、三百席あるホールを借りてやったんですけれども、たくさんの人に来ていただいて、バクリさん自身にとっても非常にやりがいのある機会だったと思います。そういう縁がありまして、今回日本にバクリさんに来ていただくにあたって脚本を担当したということです。

現地で私自身そういうことをする中で、イスラエルの中のパレスチナ人、イスラエルの中でイスラエル国籍を取って生活しているパレスチナ人社会と触れる経験がありましたし、そのパレスチナ社会が生み出した俳優であるモハマッド・バクリの位

置だとか、バクリさんとパレスチナ人の共同体との関係というものに触れたというか、内側から理解しような機会だったというふうに思っています。

今思えば、バクリさんにとっては非常に大変な時期、困難な中であつた時期だったわけです。それがこの今見ていただいた映画の中でも描かれていたわけなんです。

それで、『ジェニン、ジェニン』に関して、ユダヤ人社会から非常に強いバッシングがあつたということ、それは四方田さんが書かれた文章の中でも報告されていますけれども、それと同時に、イスラエルのパレスチナ人社会の中でも反応は多様だったと思うんです。ちよつとバクリさんの前でそういうことを言うのは非常に言いづらい部分があるんですけども、決してみんなで温かい言葉で迎え入れたわけではなかつたと私は思います。

私がつ聞いたのは、これは批判というよりも、悪口ですね。イスラエル人であるバクリが、ジェニンで大虐殺が起こつた、それつとカメラを抱えて撮影に行く。それで自分の、言つてしまえば商売のネタにして撮影して、それで映画をつくるという、そういうことが許せないという怒り、そういう言葉も実は聞いたんです。

一方でバクリさんをもちろん擁護する人もいて、そんなことを言つたらイスラエル国内に住んでいるパレスチナ人は何もできないわけです。彼らがイスラエル国籍を持つて、イスラエル

社会の中で生きているという現実はあるわけです。そこで何ができるか。たくさん批判もあるわけだし、占領地のパレスチナ人からすると、ユダヤ人と仲よくやつていようにも見えてしまふ非常に中途半端な位置にいる人たちなんです。一方でそういう批判をされながら、手足をもがれたような、そういう困難の中にあつて何をするか。その一つの選択肢として、バクリさんはさまざまなバッシングなり批判も覚悟の上で、カメラを持つてジェニンに行ったわけです。

その成果が、先ほど皆さんが見られた『ジェニン、ジェニン』という映画だったわけです。ぜひ、見た映画については、観客の皆さんにご意見とかご感想を伺いたいと思います。

私がここでバクリさんに伺いたいと思うことは、たくさんあるんですけども、一点、昨日バクリさんが演じられたムタシャール（悲楽観屋）、主人公のサイドという人物は非常に複雑な人間なんですけれども、アラビア語でスフリヤと言いますが、つまり、諷刺の力を非常に生かしてつくられた人物像なわけです。バクリさんがそのサイドという人物を演じられるようになった経緯といいますか、バクリさんご自身がサイドとなつて、舞台上で、人の前で演じる、そこでバクリさんご自身がなぜそのサイドという非常に複雑な人物を演じようとしたのか、それについてちよつと伺いたいと思います。

と言いますのは、笑いというものの持つ力というのを一方で感じたわけです。困難な状況の中にあつて、その状況に対する

ときに色々な対し方というのがあると思うんですけども、状況そのものを笑い飛ばす、そしてその状況を笑い返すだけじゃなくて、自分をも笑いの対象にしてしまうような、そういうところが起こることがあります。

さきほどの『ジェニン』の映画の最後の中で、本当に悲惨な、言葉を失うような情景があった中で、そしてあの非常に聡明そうな女の子が、私たちはもう絶対負けない、武器で身を守ったイスラエル兵なんかより強いんだというふうに、すごく真つすぐな抵抗の意志を感じてはっとさせられた。その後、一番最後の場面で、路上で一人のおじさんが、アメリカの支配者をもあざ笑うような道化師として最後しゃべっていて、あのジェニンのキャンプの中で「あはは」と笑い声が上がって映画が終わりました。ああいう、非常に悲惨な、困難な情景、その状況の中にあってもなお出てくる笑い、なお自分たちで笑いをつくり出す、その力について、バクリさんご自身はどのように自分のものにされようとしているのか。二本目の映画、バクリさんの一家がイスラエル社会の中でパッシングの対象にあった、あの中で、バクリさん自身がどういう打開策を見出そうとしたのか。ああした状況の中で、バクリさんにとっては笑いと笑いのものを武器にすることはいまだ可能なのか、ぜひ伺いたいと思いました。とりあえずここまでにします。

四方田 いきなり何か核心の質問に入ってしまったのですが、今の白杵さんと、それから田浪さんの発言を聞かれた上で、バ

クリさんに自由にしゃべっていただきたいんですが、よろしくお願いたします。

今の話を聞いた上で自由にしゃべってください。

バクリ 皆さん、どうもありがとうございます。この企画を立ち上げてくださった四方田先生にも感謝いたしますし、昨日のお芝居と、あとフィルムを見てくださった皆さんにも感謝いたします。

私のことを話すのはとても難しいことです。理由は二つあります。理由の一つは、皆様がフィルムでごらんになったような事情だからです。

現在の私の状況を話すのはとても困難だと思います。それは二つ理由がありまして、最初の理由は、昨日皆さんはお芝居を見にきてくださって、今日こちらに来てくださいます。二日にわたって話をしないといけないわけですけど、二つ目の理由は、皆さんが話したことをまた私が話さなければいけないということをしたくないということです。三つ目が、会場の雰囲気重くしたくないということです。とりあえず、質問をしてくださいば話したいと思います。

白杵 簡単な質問でありますけれども、先ほど田浪さんも言ったんですけども、パレスチナ人、あるいはアラブ人の『ジェニン』に対する反応はどうなんだろうかといい点、つまり、どのように受けとめているかということです。

バクリ 最初の議論の『ジェニン』は、ジェニン

というのは難民キャンプのことを指します。

一番初めのこの上映というのは、ジェニンの難民キャンプの中でやりました。だって、私そこで編集したんですから。八月で超暑かったんですけど、小さな部屋でした。そこにヴィデオ装置とテレビがあったんですけども、ヴィデオの調子が非常に悪くて五分ごとに止まってしまいうようなものでした。すべてのフィルムを全部上映するには三時間かかってしまいました。そして、人々は笑い始めました。キャンプの人たち、彼らは、悲劇ではなく、喜劇を見ていると思ってしまったんです。

最後に彼らは私に「ありがとう」と言いました。自分たちで話すよりもいいやり方で私たちの物語を語ってくれたと言いました。それを聞いて、私はとてもうれしく、誇りに思いました。なぜなら私は恐れていたからです。なぜなら、このフィルムには血であるとか、死体であるとか、軍隊の蛮行であるとか、そういうものが映し出されていて、一般にアラブの人々はそういう残酷なものを見たいと思わなかったからです。私はそれを彼らに見てほしいと思いましたが、彼らは見たがりませんでした。しかしキャンプの中の人々は私に語りました。すべての人々が、映し出されたものに対して満足していると語りました。それは私にとって大きな支援でした。

そして私はエルサレムに赴きましたが、それは大きな失敗でした。そこでフィルムを上映したんですけども、人々は叫び、罵声を浴びせ、その場で議論を始めました。泣き出す人々もい

ましたし、私に罵声を浴びせる者もいました。それは私にとって大変な失敗だったかもしれませぬ。

三日後、フィルムを上映することが全イスラエルで禁止されてしまいました。検閲の対象になりました。アラブの人々とパレスチナ人の住む、すべての国々は、私の映画を気に入ってくれました。それは人生のうちの一部を切り取ったものです。五十年以上にもわたる占領下において、私のフィルムが占領に對するもう一つの答えになったからです。イスラエル側も一つの主張を持っていますが、パレスチナ側にも同じように物語、主張がある。それはすべて一つの事象の中での物語なわけです。

ずっと叫ぶということ、自分の考えを表現できない状態であつたのが、それを一気に表現できる場となった。もしだれかがあなた方を抑圧し、それに対してあなたたちが失望を感じたときに、そのことをだれかに伝えたいと思うでしょう。叫びを立ててそれを表現しようと思います。別の自分が感じている感情を一気に外へ向けるわけです。

白桦 じゃあ、もう一点。今の質問に関連してなんですけれども、エルサレムのシネマテークでは大変意見が割れてしまったというお話をされたんですけども、ぜひイスラエル人に見てもらいたいというふうに思われたという、その理由、そして結局それが拒絶されたということのように思われますか。

バクリ ジェニンに私が行きましたときに、それは初めての訪問でした。最初の五秒間、私は何も考えることができませぬ

でした。立っていることすら難しくできませんでした。なぜなら私が見たものは、ヴェトナムかどこ別の場所で起こったことのように思えたからです。このようなことを人がほかの人にできるということ私は信じられませんでした。ですから、私は話すこともできませんでしたし、考えることもできませんでした。最初の二時間はそうでした。

しかし不幸なことに、そういうふうな残酷な風景に私は慣れてしまったわけです。人間というものは歴史を通じて悲劇というものにはすぐに慣れてしまうものです。私たちはそれを知っています。ですから、私もその悲劇とともに生活を始めてしまったわけです。

しかしながら、私はたくさんの流血を見ました。たくさんひどい話を聞きました。それを私はだれにも話したくないと思いました。エミール・ハビービの墓前でもそれを話したいとは思いません。彼の眠りを妨げたくないからです。しかし同時に、心の奥底ではイスラエルの観客のことを考えていました。いづれにせよこのフィルムをつくり、このフィルムを見ることによって影響を与えることができる。それを見ることによってイスラエルの観客が影響を受けることができる。そこで、それをソフトなものにしようと思いました。それを観たイスラエル人が共感を覚えられるように。イスラエル人がそれを見ることによって共感を覚えるようにしてもらいたいと思ったのです。拒否するのではなく、それを受け入れてほしかった。誠心誠意そ

れを受け入れてもらいたかったわけです。パレスチナの人々に貧しくて年とった人も、小さい女の子も、息子を救えなかった医師も出てきましたし、撃たれたことによって流産してしまった妊婦もいました。伐られてしまったヤシの木。猫も真つすぐ歩けなくて、瓦れきの崩れたところを歩いていました。猫が歩けない以上、人間だって歩けるはずがありません。私は充分それに對してナイーブ過ぎたのです。

今、四年前に起こっていたことを考え直してみると、私は間違っておりました。イスラエルによって映像を禁止されてしまったのです。イスラエル人にとって私はビン・ラディンのような悪漢でしかありません。私がビン・ラディンに見えますか。ビン・ラディンに似てますか。そうは思っていないでしょう。イスラエルの中でこの私のフィルムは真実でないとプロパガンダであると、非難されました。——彼らは人にそういうふうに話すように指示したのです。それはただ一つの理由です。イスラエルは一九四八年にパレスチナ人の権利を犯して、不当な占領を続けていると、私は自分の意見を述べたいと思っています。イスラエルはジェニンが西岸で行っている自分の罪を隠したいと思っています。イスラエルはジェニンというところで何を行ったかというのを完全に隠しています。

私の意見では、五十八年間にわたって、イスラエルというのはパレスチナ人に対して何を行ってきたかをずっと隠し続けていました。それが私の結論です。しかし不運なことに、イスラ

エル政府はイスラエルの人々をも利用しました。しかしそれをどういうふうにご利用したかという点、ホロコーストの結末を利用しているということです。

不運なことに、イスラエルのメディアは自由なメディアではありません。イスラエルのメディアは、イスラエル政府のスポークスマンです。ということは、イスラエルの政府とメディアは一緒にあってモハマッド・バクリという者に対して何か企んでいるということです。この会場にラミとレアという二人のユダヤ系イスラエル人がいます。もう一人は、わたしというアラブ人がいます。レアはこの大学で三日前に初めて知り会いました。イスラエル人というのは、ヨルダン川西岸で何が起きているか全く知りません。もし西岸で何が起きているか知っていたとすれば、彼らは決して沈黙はしないでしよう。私はそれを確信しています。しかしイスラエル人自身がメディアによって利用されています。したがって、彼ら自身が残念ながら政府のスポークスマンとなってしまっています。

十八歳の若い青年たちが軍人になって、西岸に送られ、まず最初に彼らには何の知識もありません。何の経験もありません。教育もありません。大学に送られる前に、彼らは軍隊に送られてしまうからです。これは偶然ではありません。この若い一青年が母親のところへ帰ったとしましょう。母親に、西岸でどんなことが起こっているか、何をしたかということをお話することが恥ずかしくないとはいえるのでしょうか。その青年は母親のと

ころに戻って、「ねえねえ、お母さん、ゆうべパレスチナの家に入って、そのうちのお父さんの頭を蹴り飛ばしたり、そういうようなことをした」と言うでしょうか。彼の母親にとって、彼はヒーローです。イスラエルという国を守るヒーローです。イスラエルがテロリストと戦っているという、その戦いの中のヒーローだからです。

『ジェニン、ジェニン』というフィルムは、ジェニンの人々について語っている作品画です。しかしながら、全イスラエルで公的に、そしてまたたくさんの人々によって否定されたフィルムでもありません。これはなお今ではガザで起っており、また西岸でも起っていることです。

大勢の人々が非難しています。なぜならば、パレスチナ人は今度ハマスを選挙で選んだからです。ハマスは非難されています。なぜならば、ハマスがテロリストを育んだと言われているからです。しかし私はあえて聞きたい。そのテロリストを育む背後にいるものは誰なのか。なぜなのか。しかし、これは別の話です。

結論として申し上げますが、イスラエルの政府とメディアが癒着し、イスラエルでのまずは上映禁止、そしてまた日本をはじめとしたほかの国でも上映を禁ずること、上映しないように動かしているというふうに信じています。そして全世界でも。日本のテレビ会社はこのフィルムの放映を拒否しました。ドイツやフランスのテレビ会社も拒否しました。また、何とアラブ

の国々もこの映画を拒否しました。なぜならば、ほかの国々は、『ジェニン、ジェニン』を上映するにはイスラエル政府の許可が必要だからです。

ヨーロッパの多くの国はイスラエル政府を批判しています。しかし、そうするとそれはアンチセミティズム（反ユダヤ主義者）というふうなレッテルを張られます。イスラエル人にとっては、イスラエルを批判する人はそのまま反ユダヤ主義者というレッテルがつけられます。やっつけているのはイスラエル政府です。イスラエル人ではありません。これが唯一の問題です。

四方田 ありがとうございます。非常に力のこもったというか、体を張ってる発言をいただきました。気合いが入ります。では、またいろいろお話を聞くことにして、今度は田浪さんから質問を。

田浪 非常に力強いご発言でした。ですから、聞いて非常に気持ちが悪く感じましたというか、ちょっと緊張しながら聞いておりましたので、少し質問というか、別の角度から話をしたいと思います。

先ほどの笑いの力に関しての質問なんですけれども、もう一度簡単に繰り返しますと、『ジェニン、ジェニン』の非常に緊張感のある映像が、最後にキャンブの人たちの笑い声の響く場面です。終わったのが非常に印象的だったんですけども、バクリさんご自身が笑いの力をどのように考えていらっしゃるのか。それから、昨日のお芝居では主人公のサイドの役を演じたわ

けなんですけれども、状況に対して、敵を笑い飛ばすと同時に、自分自身を笑うような、その役割をバクリさんご自身が引き受けたわけですよ。それは芝居の役だけでなく、現実のバクリさんの立場にも重なります。困難な状況に対してバクリさんごどのように引き受けてきたのか、そして今後どういうふうに引き受けようとしているのかということ伺いたいと思います。

バクリ 難しい問題です。敵を笑うことはできないと信じています。自分自身を笑わなければいけません。まず最初にあなたの悲劇を笑わなくてはいけません。私には敵を笑う権利はないと思います。もし敵がいたとすれば、敵である自分自身を笑うべきです。この劇は私自身を笑うものでもあり、また敵が彼自身を笑うものです。笑うというのは楽観主義を与えてくれます。私は、笑い、そして泣くことで事態を進めようと思いました。笑うというのは、内部から来るものと信じています。

悲劇に関しては、別に新しいことを言うつもりはありません。エミール・ハビビを含めて、人々はたくさんの理由で、悲劇というものをつくってききましたから。

笑いというのはある種の愛情というものを作ることができると思います。寛大さ、寛容というものも笑いは作ってくれます。だから、この理由において、私は笑いを使います。

笑いはまたほかにもいい機会となります。物事を簡単に容認するため手段だからです。劇場に行く人は、わざわざチケットを買って、車を運転してきて、駐車場に駐車代まで払って来て

くれるわけです。何時間もそのために来てくれる人のために、私は笑いを提供したいです。彼らを忘れないでいただきたい。もちろん演劇というのは楽しい場所です。悲しいことを話していても、劇場というところでは楽しいことが行われていなくてはなりません。なので、笑い続けてください。

四方田 ありがとうございます。非常に興味深い指摘だったと思います。みずからを笑うという両価性は、本当に彼のこの作品のみならず、例えばミハイル・バフチンの一連の笑いの学説に通じるという、普遍的な発言であると思います。

臼杵 『カップ・ファイナル』という映画の中で、これはレバノン戦争のときの映画なんですけれども、パレスチナ人のゲリラの隊長の役割をやっていました。そういうパレスチナ人のゲリラの役と、また対極の役もやっているということですが、バクリさんにとってどういう役が、自分にとってのアイデンティティーということを考えて、一番好きな役でしょうか。

バクリ この役が好き、あの役が好きというものはあまりないんです。すべての役というものを私はやらなくてははいけないと思います。しかし、時々あるシナリオのほうが別のものよりよかったのじゃないか、そんなことはあります。その意味でここにいるということが私にとってとてもいいことです。もちろん今の状況では今回演じた役が、このセッティングでは私の役だということですが、

四方田 ちょっと映画研究家としてお聞きしたいんですが、

私は長い間日本映画が在日朝鮮人をどんなふうに描いてきたかという研究をしてきました。ご存じと思いますが、日本は朝鮮半島を長い間植民地支配した後、多くの意味で傷跡を残してきました。そして今でも在日朝鮮人に対する差別問題が続いています。日本映画の中に朝鮮人が出てくるときには、その多くは道徳的に正しい存在です。そして彼らは卑屈で、臆病で、嘘をつく偽善的な日本人に対して、本当の正義とは、本当のモラルとは何かということを誠実に、道徳的に説く、きわめて肯定的な人物を演じるわけです。つまり、必ず日本人のだめ男がいて、それに対して、背が高くて、ハンサムで、道徳的に正しい朝鮮人というのが出てくる。

私がイスラエルのフィルムをずっと見てきてバクリさんの役を見てみると、非常に道徳的に正しい、カッコいい役が多い、例えば古代ペルシャの皇帝を演じるとか、あるいは『カップ・ファイナル』でも、ローマで歯医者さんをやって、ちゃんと家族もいるのに、故国パレスチナのためにはせ参じた義勇兵をやるとか。あるいは『壁の向こうに』では、パレスチナゲリラの隊長で、監獄の中にいながらも監視たちの不正を暴露しようとして、自分の人生を犠牲にしても、ユダヤ人も含めて全囚人たちを救おうとする人物を演じる。それに対して、その相手役のユダヤ人は必ず三枚目で、だめ男であったり、あるいは無学・無知な人間、粗暴な人間であったりするわけですね。

バクリさんがイスラエルのフィルムの中でパレスチナ人を演

じるときと、あるいはラシッド・マシユラウイとかミシエル・クレイフィの中で、つまりパレスチナ映画の中でパレスチナ人を演じるときでやはり少し違いがあると思うんです。パレスチナ映画の中で、あなたは、ちょっと頭の足りない、気が狂った道化師を演じたり、あるいは田舎者で、イスラエルの国の事情がわからない謎めいた労働者を演じたりしています。いわば怪しい役ですね。この違いというものが私には非常に気になるんですが、何かコメントをいただけますか。

バクリ パレスチナ映画とイスラエル映画の両方に私は出演していますが、私の役割というのは違いはありません。なぜならイスラエルで映画をつくっている人々が私を選ぶときには、私たちはもう既にお互いに仲がいいからです。理想的には、パレスチナ映画のときにも同じような気持ちがあります。しかしそれが政治的な映画となった場合には、もちろんコンテキストがあります。私自身と監督との間に。私は監督たちの間ではちょっとした評判はです。つまりこの理由で。よく喧嘩するからです。

『ブライヴェイト』という、一番最近のその一つ手前のフィルムのことです。日本でも上映されたと思いますが、私はイスラエルの俳優と紹介されていました。これはイタリア映画でした。実際に起こった話です。ガザのラファフというところでもまだに起こっていることについてのフィルムです。イスラエルがガザをA、B、Cという三つに分けて、Aにある家族

を軟禁状態にしました。そこで私が家長を演じたその家族がブライバシーを全く失うという、そういう話です。そのために、そのフィルムは『ブライベイト』という題名がつけられました。私たちとイスラエル軍隊との関係、そしてまた私たち内部の関係を描いたものです。イスラエルの目からすれば、パレスチナの軟禁状態にされたその家族の父親として私は犠牲者を演じていました。かわいそうな犠牲者です。そしてイスラエルのその友人は人道主義的な役割を演じようとした。

このフィルムを撮ることに同意したにもかかわらず、やはりこういうような役割の一つ一つ、ちょっとした対立があらわれます。このフィルム自体は確かにイスラエル軍の支配はよくない、だめだ、悪いことだと描いているわけですが、支配というのがいいことでありましょうか。しかし私たちはこのフィルムをつくることに同意しました。お互いに何とか努力しながら、お互いに下から少しずつ積み上げていこうと思っています。こちら側は犠牲者、向こう側は人道者という描き方。私たちパレスチナの演劇者とそしてディレクターとの関係というものも、マクロ的なものだと思います。この関係は非常に繊細な問題です。当然のことなんじゃないでしょうか。なぜならば、私たちには違っているわけです。二つの違うものなんです。『羅生門』というフィルムにおいて三つの意見があるかのように。

田浪 ちょっと私の個人的な関心の話に引き継いで話させていただきたいんですが、今映画のお話をいろいろ伺って、私も

知らないことがあつて勉強になったんですが、昨日のお芝居を見られた方も多いかと思いますが、お芝居の話にもかかわる話をしたいんです。

まず私は、今日の二本目の映画『あなたがいなくなつて以来』でバクリさんと、イスラエル共産党の指導者であり、作家であつたエミール・ハビービのお二人の親交というのをあの映画で初めて知つたんです。それまで私の中で、作家エミール・ハビービと俳優モハマッド・バクリというのが全く結びつくことがなかつたんです。エミール・ハビービという、政治家であり、作家である人物と、それからモハマッド・バクリという人物。モハマッド・バクリが日本で知名度を上げたのは、何と言つても『ジェニン、ジェニン』の映画監督としてですね。

バクリさんとおつき合ひしていても、何かこう、非常に不思議な印象を受けることがあります。さまざまな側面、さまざまな顔お持ちですよ、バクリさんご自身が。ユダヤ人社会に向けて話すとき、それからイスラエル国内のアラブ人、パレスチナ人の共同体の中でバクリさんがアラビア語を使って話をしたり、彼らと親交したり、それからバクリさんがお住まいの村で村の人たちとおつき合ひしているとき、すごくこう、さまざまな顔を持つている。その辺のさまざまな顔について、私自身がまた何かこう一つの焦点を合わせられないような部分もあります。

それは恐らくバクリさんが特別そうなのではなくて、恐ら

くイスラエル国内に住んでいるパレスチナ人の存在そのものが非常に分裂的で、多様な顔を持たざるを得ないからなんだと思うんです。ユダヤ人社会に対して顔を向けるとき、それから彼らの共同体の中で生きているとき。そういう印象を私自身がまず持っています。

話を戻しますと、作家であり、イスラエル共産党の指導者であつたエミール・ハビービとバクリさんご自身の親交の経緯ですね。私自身は映画の中で初めてお二人の関係を知つたわけなんですけれども、どのような経緯でおつき合ひがあつて、どのような影響を受けてきたのか。それから、エミール・ハビービ個人ではなくて、イスラエル共産党という政党との関係とかイデオロギー的なあり方とバクリさんのかかわりについても関心があります。

イスラエル共産党というのは、ユダヤ人とアラブ人の共存を掲げている政党なわけなんです。共存と言いますが非常に誤解を受けると思うんです。今のありようをただそのまま認めて、ただ単に一緒に仲よくしましょうという話ではないはずなんです。

つまり、今あるイスラエル社会、今のイスラエル国家のあり方をそのまま受け入れて共存するのではなく、イスラエルの中のユダヤ人とアラブ人の差別をなくして対等な関係の中で共存していこうという、そうした理想を掲げたのがイスラエル共産党だつたと思うんです。しかし「あなたがいなくなつて以

来」、つまりハビービが亡くなって後と、そしてジェニンの虐殺を経験した後、そうした理想のとらえ方がどのように可能なのか。

バクリ 大変長い質問でしたね。(笑)最初の質問の、どの役割が好きですかという質問にちょっと戻らせてください。弱い人でありたいです。弱い人の役割をしたいです。ヒーローではないです。それから多様な顔ということだと思います、私は老いつつあります。五分ごとに老いていきます。そして変わっていきます。四方田さんが来年私をまた招待してくださいるときには、また違う顔になつてほしいです。でも同じ声です。同じ一つのお腹から同じ声が出ます。ニューヨーク、ガザ、東京、そしてラマラ、そこで語っていること、それは、私とその裏側で語っていることと同じです。責任感のあり方です。私の言葉に対して。私は自分で鏡に向かって、おまえは嘘をついたのではないというふうにちゃんと言いたいです。なぜならば私は一人の父親であり、六人の子供がいて、友達、その子供たち、そしてまた友達の子供たちをも守ってあげたいです。その子供たちがパレスチナ人であろうと、イスラエル人であろうと。

私の友人である亜央江さんは一生懸命仕事をしてくださいました。私の村にも来てくれて、家にも。彼女にあまり時間を与えることができなくて申しわけないと思っています。彼女はそのときに勉強していたわけです。ですから、確かに私が彼女にいつばい時間を使ったら、今度は彼女はほかの人たちに会うことがで

きなかったらどうと思います。私は一つの顔にしかすぎません。エミール・ハビービと私の関係において、エミール・ハビービは私にとって師でした。象徴でした。責任という象徴でした。

そして私の現在、そして将来、もつとさらに将来のことについて指し示してくれる人でした。笑うことを教えてくれて、他者を尊敬することを教えてくれて、共存というものがなければ生きていけないということを教えてくれました。共存というのは尊敬をはぐくみます。そして何の偽善もなく、パレスチナとイスラエルの真実の平和に基づくのです。エミール・ハビービはラミのお父さんのようでした。彼もコミュニストで、共産党のメンバーでした。人道としての平等に基づく共存というものがなければ平和はあり得ないということを教えてくれた人です。

共存についてですが、ハイファで語られている共存というのは本当の意味での共存ではないと思います。主人と奴隷の共存を意味しているにすぎないからです。ボスト労働者の関係の共存ではないからです。私とエミール・ハビービとの関係は友情でした。彼はよく私を笑い飛ばしていました。私も笑いしました。彼が電話で話しているときよく笑ったものでした。電話で彼が話すとき、いつも大声で話すんです。ハビービが運転するのを見ているのも楽しかったです。ひどい運転をする人でした。そして、魚釣りがうまいふりをしていたこともおかしかったです。全然、魚はいなかったのにね。(笑)一度ドイツで釣りをしましたが、湖で、さあ釣りをしようと言って竿をあげた瞬間

に、水に落ちなかったので、あれ、おかしいなとよく見たら、まだ後ろの木に引っかかっています。(笑)木に登って、その糸をとってくれと。いい友達でした。懐かしく思います。寂しく思います。(拍手)

四方田 では、ここでちょっと視点を変えて、モハマッド・バクリさんを、彼の助手であり、親しい友人であるラミ・リヴネフさんが、どんなふうに見てらっしゃるかということをお聞きしたいと思います。

モハマッド・バクリさんはパレスチナ人なんですが、ラミさんは同じイスラエル人であってもですけどもユダヤ系なんです。しかし二人はすごく理解し合って、もう二十年間ぐらい行動をともしして、お互いの仕事を支え合ったりしているわけです。

ラミさんは本来は校正者であり、今はユダヤ系の子供たちにアラビア語を教えている先生なわけですが、今ワインのお仕事を何かされているんですが、まず、どんなふうにしてバクリさんとどうやってこのアーティストと知り合いになったか、それから、彼のことをどんなふうと考えていらっしゃるのかということをお聞きしたいと思います。

ラミ・リヴネフ あるとき私が語学学校で教えていたとき、バクリが来まして、ユダヤ人の囚人と、アラブ人、イスラエル人の囚人についての比較について、彼らの実態がどういふものを調べにきました。『壁の向こうに』というフィルムは、イ

スラエル、ユダヤの囚人と、それからアラブの囚人を描いているものです。そして監督が私のところに来ました。その理由は、私自身が四年間パレスチナ人を援助したということの下獄していたからです。結局、私はフィルムの相談役になりました。実際に事実に近い、事実であるということを感じさせるためにアドバイザーをしました。

そしてカメラの向こう側に控えているんです。バクリはそのフィルムで主人公を演じていました。最初に会ったのはそのときです。さらに重要なことは、私たちは同じ意見を持っていて、そして同じ夢を持っていたということです。単純な夢でした。私は民主主義の国に住みたい。自分自身の意見を持ち、信仰や出身民族やイデオロギーの違いはあっても、それぞれ一人一人の意見を言うことができる民主主義の国に行きたいです。そしてイスラエルとパレスチナがそういうふうな国であってほしいです。

私が重要だと思うことは、どの民族も自分の意見を表現する。文化的にも、そして民族的にも、そして個人的にも意見を表現できる。その国の名前が何であつてもいいんです。ただ、自分の意見を表現することができたらということです。

白杵 今言葉の問題が出ましたので、ちょっと言葉の問題についてバクリさんに質問したい。バイリンガルの問題です。

演劇ではヘブライ語でやっていますね。例えばイスラエルのアラブ人の有名な作家でアントン・シヤマースという人がいま

す。彼は『アラベスク』という小説をヘブライ語で書いている。バクリさんも演劇はヘブライ語でやっている。もちろんバックグラウンドとしてはアラビア語で初等中等教育を受けて、大学に入るときには恐らくヘブライ語で試験を受けて入らざるを得なかった。バクリさんにとってヘブライ語って何でしょう。

バクリ ビューティフル・ランゲージです。(笑) 私はヘブライ語を愛しています。私の言語でもあります。母語はアラビア語ですが、第二の母国語言語としてヘブライ語があります。ヘブライ語を愛しています。ノスタルジーがあります。初恋はヘブライ語でした。(笑) 演劇での最初の作品はヘブライ語でした。パレスチナには劇場はなかったわけですから、一番最初にまずヘブライ語でやっていました。ハイファ市立劇場でヘブライ語でやっていました。四年前にもユダヤ人の恋愛物語を劇場でヘブライ語で演じました。

お互いにヘブライ語を知っているということ、イコール、言語を話す人に対して尊敬がある。他者の言語を知ること、これは、その人に尊敬を示し、その人の存在を認めることです。私にとってはそういうものになります。

ヘブライ語を知ることによって、イスラエルをユダヤ人を恐れることをやめました。言語は確信を与えてくれます。ヘブライ語を話せるということは、まさに言語というのはそういうものです。言語は人そのものです。それ以上のものです。

田浪 バクリさんはテルアヴィヴ大学で演劇を勉強されたと

いうことなんですけれども、イスラエルのアラブ人、パレスチナ人が、アラビア語を教育の言語として使いながら演劇を勉強できる場というのはイスラエルの中には存在しないのでしょうか。

というのは、私たちが前にしているのは国籍で言ってしまうイスラエルの演劇ということになるわけですが、イスラエルの建国以前からパレスチナには演劇があったわけです。例えば『パレスチナにおける演劇運動』という本を見ますと、そこではイスラエル建国以前からの、一九一〇年代ぐらいからのパレスチナのさまざまな地区での演劇の運動の記録を見ることができるところです。もともとパレスチナには宣教師の学校があつて、欧米の文学や演劇、文化活動が、私たちが想像する以上に多分パレスチナの中にあつたということも背景として思うんですが、パレスチナ人にとって演劇というのは、わざわざユダヤ人の教育システムによって教えられるものではなかったはずなんです。バクリさんのお芝居の中に当然イスラエルの教育によって得た演劇の知識と同時に、パレスチナ人の持つてきた伝統的な表現方法などが含まれているわけです。

それは私の考えなんです、バクリさんにぜひその点を伺いたいと思います。

バクリ パレスチナには演劇学校がありません。あつてほしいです。一九四八年以降、そして一九四八年以前も、公的な意味でのパレスチナ演劇学校はありませんでした。イスラエルが

禁じたわけではなかったんですが、しかしなかった。そこで私はテルアヴィヴ大学に演劇を学びにいきました。

パレスチナにおいては。劇場というのはまず何かの機関として存在してはいませんでした。そういうこともあって、父親は、私が演劇を勉強することをやめさせようと思いました。医者になるか、大学に残ってほしいと思っていました。

どのぐらいアラブの演劇伝統に負うところがあるかという質問に戻ります。まず、アラブ人はお話が大好きです。それ以上に話すこと、行動よりも話すことが好きです。創造する以上に好きなのです。

一九四八年以前、それからその後も、特に一九四八年以降はパレスチナという地域はゲットーのようなものでした。とりわけ最初の十五年は、閉鎖されたままでした。一九四八年から一九六五年にかけてはね、子供のときでしたが、父が夕方帰ってくるとその日何をしたか、何を考えたか、全部お父さんが話す。それを私たちはずっと聞いていました。その話はおもしろかったです。単純なことでしたが。

子供のときは煙草をつくっていました。栽培して、それを収穫したものを押していくわけです。おじさんが煙草の役目でした。煙草の作業をしているときに、おじさんやそういう人たちを聞くというのが慣習となっていました。そういう話をする事、そして聞くこと、それが私の今の役割に影響していると思います。物語をしてくれるのは普通はおじいさん、おばあさ

んでした。古い昔話を知っていたのは彼らでしたから。ほとんどの話は恐い物語でした。それをハリウッドに売ったら、きつと『ハロウィーン』1、2、3、4、5というシリーズができたと思います。(笑)すべてはそこからじゃないでしょうか。

私たちはちょっとしゃべり過ぎますよね。(笑)お休みが必要ですか。

四方田 じゃあ、もう我々も本当にずっとしゃべってきたわけですが、このあたりで、昨日から芝居を見てくださった、そして映画を二本ごらんになったわけですから、皆さん、モハマッド・バクリさんについて多くの知識とかいろんな感想をお持ちだと思えます。ここで何人か質問を受け付けたいと思います。

女性① 田舎のほうで農業関係の仕事をしています。映画の質問なんですが、十年ぐらい前に『カップ・ファイナル』という映画をテレビで見ました。それ以来バクリさんを知ったわけなんですけれども、俳優としていろんな作品に出てらっしゃって、キャリアを重ねてきたわけだと思えますが、『ジェニン、ジェニン』では撮られるほうではなくて撮るほう、制作するほうに回ったわけですね。それがいろいろな影響を及ぼしたということ、これから、将来、演劇や映画の中でどういうふうに関わっていききたいか。バクリさんがこれからどういうふうにならうという映画や演劇の世界とかかわっていききたいか。演じるほう、撮るほうと両方ありますけれども、そういうこと

を覚えていたかと思えます。

バクリ ラミとこれから演劇をつくります。しかし、まず一番今考えているプランは、この『悲観楽観悲運のサイド』です。この作品を映画にすることで。

女性② 現代イスラエルの政治・文化のことを勉強しているんですが、簡単な質問を二つさせてください。

『あなたがなくなつて以来』のなかで、DVDを息子さんが売られている場面がありました。買ってくれる人、買ってくれない人、いろいろ出てきていましたが、その後、いろいろ最高裁の結果なども踏まえ、どう反応されるのかというのがまず一つの質問です。

バクリ 確かに最高裁は上映禁止を宣言し、それを禁止したわけなんです。結局上映を許したわけなんです。しかしながら二年半にわたつてインターネットやあらゆる情報を通してバクリ、そしてバクリの家族、『ジェニン、ジェニン』、そういういったものに対してもう反感というものが国家的に形成されてしまったがために、その後の上映が許可されても、実現されていません。

女性② パレスチナの人たちの伝統の中におじいさん、あるいはおばあさんがいるいろいろな物語を子供とか孫とかにしてくれらるというお話がありましたけれども、そのような伝統文化は、現代でもやはり受け継がれているのですか。少しずつそういうことも変わってきているのかどうか。

バクリ おばあさんは亡くなりました。現在はかつてのものではありません。アメリカ化、イスラエル化。イスラエル国内のパレスチナ人の日常生活というには、あまり伝統的なものはありません。もうどうの昔からインターネットを使っているし。残念なことに。

男性① 印刷労働者です。質問なんですけども、先ほど『ブライヴェート』という作品についてお話されていたかと思えます。パレスチナの町の郊外の一軒家に住む一家がイスラエル軍に吸収されて、そこがイスラエル軍の拠点にされてしまう。そのイスラエル軍と同じ屋根の下で暮らさざるを得ないパレスチナの家族が、いろいろにそのアイデンティティを図りながら苦闘していくという、そういうお話だったと思うんですけども、その話をトレーラーで見まして非常に興味を持っていました。僕はその作品を演じられているのがバクリさんだということを知らなかったんです。それで、昨日のお芝居と今日の二本の映画を見たわけです。

おそらくその作品に出られたのは、『ジェニン、ジェニン』をとらえた、もちろんあの死、パッシングを受けたという中で、その後その作品に出られていたわけです。そしてその作品の中で、彼はパレスチナ人の家の人として演じているわけです。バクリさん自身が引き受けてきた状況と、パレスチナ人をフィルムの中で演じるということでの相互の関係ですとか、どういうことを思いながら演じられてきたのかということをお訊ねし

たく思います。

バクリ 一般に思うんですが、役者は役を演じることはできません。というのは、役を演じるということイコール、嘘をついてることだからです。あなた自身でなくてははいけませんね、役をする上で。公的にも、それからプライベートにも私は私自身、父親として、理想主義者として、私は一つの同じ道です。この姿勢でもって、私はイスラエルの政府と戦っています。すべてのパレスチナ人にこのような状況で私の意味があるもので生きてほしいと思います。私は自分パレスチナのガンジーというふうにも言ってもらいたい。内的にも血を流さずに。
男性② 明治学院大学院で映画の勉強をしている、韓国からの留学生です。

今日、二本のドキュメンタリーを見ている間にずっと考えていたのは、韓国で今から二十六年前の一九八〇年に光州事件ということで大虐殺が行われたことでした。その事件はもちろん韓国の軍事政権がやったことなんですけれど、それを韓国政府はずっと隠蔽してきました。また、それに対していろんな小説家や映画監督が映画化したり小説化したりして、結局ある一つの運動になって、それが十年にわたりました。十年ぐらい時間がたつてからは、それを韓国政府は認めざるを得なくなる。それで今は、それは単なる暴動ではなく、民主化運動として評価しようというふうな歴史的に変わったわけですね。

『ジェニン、ジェニン』を見ていて、監督はこれを今までは

ドキュメンタリーとして撮っていらっしやる。これからはピービの芝居を劇映画にしてということを知ったんですけれども、もし『ジェニン、ジェニン』をまた再度映画にするならば、それはドキュメンタリーになるのか、あるいは劇映画にもなるのか。もし劇映画になるのであればどんな内容にしたいのかということを知りたいんですけれども。

バクリ ジェニンについての何かドキュメンタリー以外のフィクションフィルムをつくるつもりはないです。しかしもう一つの夢があります。なぜなら、私たちは将来について考えなくてははいけません。しかしさらにこの事象をもっと大きく広げたいという、夢があります。『ジェニン、ジェニン』で描かれた何がジェニンに起こったことというのは、実はジェニンは実は毎日現実起こっていることです。一九四八年の結果として、日々何が起こっているかというのを描きたいのです。一つ一つ、毎日何が起こっているかを描きたいのです。

小中陽太郎 アジア・アフリカ作家会議の運動をしています、今も物を書いています。昨日のドラマは実にすばらしい、楽しい演劇なので、日本の寅さんだと思えます。

そこで質問ですが、昨日の田浪さんの大変苦心の翻訳で、パレスチナの政治情勢、悲しみがよくわかりました。われわれ日本人は、アラブ、パレスチナ、イスラムと思ってるんですが、昨日の翻訳の中にはイスラム教でありげな科白はありませんでした。外したのかもしれない。そのイスラムの影響は、イス

ラエル共産党出身の作家や学者にはあるんですか。

バクリ ええ、もちろん作者はコミュニストですから、この演劇には宗教のかけらもありません。それどころか、宗教の部分、イスラムの部分为非難しています。芝居の主人公サイードはあるところで、コミュニストになるなんてケシカランというふうに言っています。コミュニズムというのはイスラムに反対するものだから、コミュニストなんてはいけいなんだと言っています。イスラムというのは麻薬だと。イスラムはコミュニスト（共産主義者）は神を信じないと行って、共産主義を批判しているということなので、イスラエルに対しては批判的な作品です。

女性③ マイムをやってるものなんですけれども、『ジェニン、ジェニン』の前後で大きく仕事の仕方が変わったということがあるかと思えます。仕事の上で制約が出てきたということがありますか。

そのことと、その後自分としては仕事の仕方として変わったというか、こういうふうな仕事をしよう、こういうふうな仕事はしないようにしようというふうに変わったことはありますか。バクリ いいえ、『ジェニン、ジェニン』というのは自分だけでできたものではないです。何の脚本もありませんでした。強いてあったといえば、友達が経験したものです。友人の女優が抗議デモの最中に、検問所の前でイスラエル兵士によって撃たれたということでした。彼女はたまたま私の横にいたので、

私が撃たれてもおかしくなかった。それで私は狂気のように決意しました。その狂気が私を『ジェニン、ジェニン』をつくることに導いたのです。仕事の後先を考えるとといったそんな余裕はなかったです。

わずか四日でこの作品をつくりました。一カ月で練習したわけです。脚本とは、強いていえば私の感情です。お金もなく、何の支援もなく、ローマのスタジオがただで貸してくれたというのは事実です。そのボスがパレスチナ人だったのです。

仕事に関しては、『ジェニン、ジェニン』を制作した後いろんな問題が起きました。ポイコットされ続けました。ほとんどすべてのメディアから無視されました。例外は、わずかただ一人ジユド・ネルマンというイスラエル人監督だけです。一年前にそのフィルムに出ました。それだけです。この「民主主義の国」でもう私は役者として仕事をすることはできないと思いません。

四方田 じゃあ、そろそろ時間が来てしまいましたので、これでこのシンポジウム、延々二時間半続いたシンポジウムをおしまいにしたいと思います。最後に、せっかくここに来てくださいましたので、これはシンポジウムとは全く関係ありませんが、バクリさんと、それからラミ・リヴネフさんに、東京の印象みたいなことをちょっとお聞きしたいと思います。

一番最初にラミさん、どうぞ。

ラミ・リヴネフ まずどんな時間についてしゃべるか。まず

私たちがここにいるのは四日間だけです。四日間のことについて全部しゃべることもできません(笑)。月島と銀座に行ってきた。私にはマルキシズムの立場があります。私の両親ジュド・ネルマンという、私の血の中にマルキシズムが流れていきます。月島と銀座の間に矛盾があるとは思いませんでした。月島と銀座で何が同じなのかわかりました。両方ともきれいでした。違う場所なのに通りを見てもきれいで、ということはお互いにお互いを尊敬し合っている、敬意を表しているという。

行動によってその人の平穏な状態というものを見ることができません。例えばイスラエルの私の近所では、だれか車に乗っている人が別の誰かと話したいときに、わざわざ道の端に車をとめないで、ど真ん中でとまったまま、後ろの車を待たせながら話すのが普通です。テルアヴィヴでも、ハイファでも同じです。そんなことが日本で起こるとは考えられないことです。

ここに来る前にイスラエル人の友達が、「日本人に気をつけるよ」と言っていました。外国人が嫌いで、態度も大きくて、あなたたちを助けようとはしない。しかし着いてみると、四方田さんが言ったんですが、日本の人々は親切で、粗暴さを許さない。

ある朝エール・フランスのオフィスを探そうとして、地下鉄の駅まで出ました。日本語をひとつも知らないまま、外へ出ていきました。まずエール・フランスに行つたときにも言葉を知らない状態でした。しかしジュエスチャーでそれなりに丁寧な質

問した結果カウンターに行つて、すぐ用件をなしとげることができました。

女性に紙を見せたら、女性がそのまま手をつないでくれて連れていって導いてくれました。そしてエレベーターの六というボタンを押しました。しかし男の人が私のメモを見て、9Fと書いてあるのを見たので、彼が私のために九階を押してくれました。

何も私はしようとはしませんでした。多くの人が手伝ってくれました。イスラエルで何でこんなことはけっしてありません。

四方田 じゃあ、今度は、同じことをバクリさんに聞いてみたいと思います。

バクリ ラミが話したようなことと同じことを私も言いたいです。ただ人々が礼儀正しいだけではありません。礼儀正しいということとよい、親切とは違います。礼儀正しくありながらも嫌な人になることもできますよね。多分このホールに来ているのはプロであり、このショーとディスカッションが成功するように努力をしてくれた人たちですね、ここに来ている人たちは。もう名前を覚えてないくらいにいろんな人たちが私を助けてくれました。しかしその人たちについて話そうというのではないのです。

近くの店でチーズを買おうとしました。お店に行つて、「チーズ」と言いますと、彼女はお母さんと呼んできてくれました。そしてまた、その人と同じように親切に振る舞ってくれ

る女性もいました。その人に善を感じました。

私が日本において好きになれなかったのは、女の人がレストランで注文を取るとき、わざわざ膝を曲げて座ってかきずいてしまうのが嫌でした。

あれは人権に反すると思います。彼女はちゃんと立って、「何にしたいですか」というふうに言ってくれていいんです。

何でそうやって膝まづくのかわかりません。私の解釈の仕方が間違っていればいいと思います。あるいはレストランに行つて、そのレストランのオーナーを首にするべきではないでしょうか。

(拍手)

四方田 それでは、長い間本当に、二時間半にわたつてこの二人の研究者と、それから俳優、そしてラミさん、長い間、皆

さん、本当にありがとうございます。それから、会場の中からも非常に興味深い、意義深い質問をいただきましたことを感謝いたします。

私は三年前にモハマッド・バクリさんに会ってインタビューしてから、何とか彼に日本を見てもらいたい、それから日本の芸術愛好家たちに何とか彼の芝居を見てもらいたいと思つていたのが、ようやくここで実現しました。明治学院大学の芸術学科と言語文化研究所、明治学院大学がこの企画を認めてくださり、国際交流基金が助成してくださつたということで、私は非常に感謝しております。

じゃあ、皆さん、これをもっておしまいにしたいと思います。

(拍手)